

使徒の働き11章1-18節 「教会が認めた、異邦人の救い」

1A 食事をしたことを咎める兄弟たち 1-3

1B みことばより優先するしきたり

1C 食事にある平和と一致

2C ペテロの偽りの行動

2B 割礼の有無

1C アブラハムの契約の子

2C 心の割礼

3C 信仰の義

2A 事の次第の説明 4-17

1B 順序立てた説明 4

2B 天からの三度の幻 5-10

1C 汚れたもの 5-8

2C 神のきよめたもの 9-10

3B 神の導き 11-14

1C 御霊の語りかけ 11-12

2C 御使いの命令 13-14

4B 聖霊のバプテスマ 15-17

1C 神の約束 15-16

2C 妨げられない神の賦与 17

3A 異邦人の救いを喜ぶ教会 18

1B 悔い改める者への喜び

1C 失われたものを捜す者

2C 終わりの日の諸国民への預言

2B 古い考えに縛られた人々

本文

使徒の働き 11 章です。私たちが、前回、10 章で読んできたことの繰り返しのような内容です。ペテロが、コルネリウスの家に入り、そこでみことばを語り、彼らが信じて、それで聖霊のバプテスマを受けたということを、エルサレムにいる兄弟たちに説明しています。それで、私はここは、さらっと読めばよいかと思いました。しかし、だんだん違うことに気づきました。

著者ルカは、非常に律儀な、記録を取るのに使命を感じていた人です。使徒の働きの初めに、自分の書き記した福音書を「前の書」と呼んでいます。前の書、福音書の続きがこの使徒の働き

だということですが、福音書の冒頭に、彼が正確に順序立てて、書き記することにした経緯があります。「ルカ 1:1-4 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています。3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。4 それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います。」この、「順序立てて書く」ということ、そして、この教えが確かであることを、自分の主人であるテオフィロに分かっていただくように、書いています。

それで、内容としては同じなのですが、彼がこれを再び書いているということが、とても大事になるのです。それは、起こったことだけでは不十分だということです。主が聖霊によって建てられた、エルサレムに兄弟たちに、異邦人にも救いが来たのだという、神の働きを知ることが、非常に大切だということです。後に、使徒の働き 15 章で、エルサレムにおける公会議があります。そこで、聖霊と彼らが、異邦人がそのまま、信じることだけによって救われることを決定します。そして、今、私たちが、ユダヤ人ではないのに、それでもただイエスを信じる信仰だけで救われるという確信を得ることができているのです。

1A 食事をしたことを咎める兄弟たち 1-3

1B みことばより優先するしきたり

¹ さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のことばを受け入れたことを耳にした。
² そこで、ペテロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちが、彼を非難して、³「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした」と言った。

ペテロと、彼に同行した人たちがエルサレムに帰りました。その時にはすでに、使徒たち、またユダヤ地方にいる兄弟たちに、異邦人たちが神のことばを受け入れたことが耳に入っていたのです。ところが、そこにいる兄弟たちの一部が、ペテロを非難しています。異邦人と一緒に食事をしたことを咎めているのです。

これは、よく考えてみると、とんでもないことです。みことばを受け入れた人々がいるのです。ところが、その救いよりも、食事を一緒にしたということを非難しているのです。誰かが救われたのに、喜びがない、別のところに思いがあるということが、あるでしょうか？ イエスも、悔い改めた罪人や取税人たちと食事をされたことを、パリサイ人たちが咎めました。主は、悔い改めた者たちについて、非常に大きな喜びがあることを教えていますし、私たちも、ひとりの魂が救われることを、喜ばないでしょうか？ それが、喜びではなく、非難なのです。ここに、彼らの思いがどこか違うところにある、間違っているということがわかります。

1C 食事にある平和と一致

食事をするということは、聖書では、一つになると言うことを意味しており、また平和の印です。パウロが、偶像の宮に献げられた肉を食べている者たちについて、コリントの人たちに説明しました。「Iコリ 10:17 パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。」一つのパンを食べることによって、それがそれぞれの体の中に入ります。そのことによって、私たちが一つになっているという意味合いがあります。だから、偶像の宮に献げられた肉を食べると、そこで拝まれている悪霊と交わることになるのだと警告しているのです。

そして、これは平和のしるしでもあります。ヤコブが、伯父のラバンから逃げた時、ラバンはヤコブたちに追いつきました。ラバンは激しく非難しました。しかし、ヤコブが、言い返しています。それで、石をそこに立てて、契約を結びます。そこを境にして、互いに相手のところに越境してはいけないと言う契約です。ミツパと呼ばれます。そして彼らは、食事をするのです。「創 31:54 ヤコブは山でいけにえを献げ、一族を食事に招いた。彼らは食事をして、山で一夜を明かした。」食事をするのが、一つになることであり、そこに平和があることを示しているのです。

ですから、異邦人と食事をするということは、彼らと自分たちが一つになることであり、そうして平和を持つと言うことです。これに反対したのです。汚れている者と一つになっているではないか！ということなのです。

私たちは、しばしば宣教の働きをしていると、同じような非難を受けます。このような人たちと、なぜ仲良くするのか？と言われる。ホームレスの人が来たら、教会で追い出されたと言う悲しい話を以前、聞きました。社会生活が送れている人と、そうでない人を分けて壁を造っているんですね。外国人が日本人の教会に来て、イエス様を信じて救われたのに、全然、牧師が喜んでいないと言う話を聞きました。それは、外国人は空気みたいな存在になっていて、壁を設けています。昔、悪いことをしていたけれども悔い改めたのに、教会の交わりに入れられない話も聞きました。そうした壁、二つを分離する敵意があることを認めなければいけません。キリストは私たちの平和であり、そうした壁を壊すために世に来られました。

2C ペテロの偽りの行動

そして、私たちは、もう一つの弱さを持っています。自分自身が壁を造らずに、みことばを宣べ伝え、また交わる必要があるのですが、他の人たちのことを気にして、本心ではない行動をとることです。むしろ、そういった行動のほうが多いでしょう。自分自身は、福音にある自由を信じていても、周りが違うので良心とは異なる、偽りの行動をとってしまうことです。

ペテロが、アンティオキアの教会に行った時のことを、パウロがガラテヤ書で書き記しています。「ガラ 2:11-13 ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、

私は面と向かって抗議しました。12 ケファは、ある人たちがヤコブのところから来る前は、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人たちが来ると、割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行ったからです。13 そして、ほかのユダヤ人たちも彼と一緒に本心を偽った行動をとり、バルナバまで、その偽りの行動に引き込まれてしまいました。」

2B 割礼の有無

そしてここに、「割礼を受けている者たち」と言っていますね。これはユダヤ人であること示している、おそらく、ユダヤ人の中でも割礼のことを大事にし、律法を重んじている兄弟たちのことを指しているのだと思います。

1C アブラハムの契約の子

割礼を受けなさいというのは、神の命令であり、神がアブラハムと契約を結ばれる時に、しるしとして与えられたものです。「創 17:10-11 次のことが、わたしとあなたがたとの間で、またあなたの後の子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中の男子はみな、割礼を受けなさい。11 あなたがたは自分の包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。」アブラハムに対して、主は、彼から出てくる子孫が、ご自身の民となり、祝福を受けるようにされました。そのしるしが、子種であることを示すため、男性の性器の包皮を切り取るのです。モーセを通して、生後八日目にそれを行いなさいと定められました。

2C 心の割礼

しかし、それは、あくまでもしるしであります。割礼を受ければ、それで自動的に契約の民になるものではありません。なぜなら、割礼の示しているのは、心の鈍さを切り取って、御霊の語られることに敏感になることだからです。「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」

3C 信仰の義

ですから、割礼の有無ではなく、大事なものは、神の命令に聞き従うことです。しかし、割礼そのものが大事としたのが、割礼派とか呼ばれる人々です。彼らは、ユダヤ教にあるように、ユダヤ民族であることが救いの条件です。そして、ユダヤ人としてのしるしが割礼であり、異邦人は、割礼を受けて、律法を守って、それで初めて改宗することができるとしていました。その上で、イエスを信じれば救われると教えたのです。しかし、異邦人コルネリウスが、神のことばを受け入れたということがなければ、使徒たちを含むすべてのユダヤ人信者が、ユダヤ人たちの間での救いしか考えておらず、眼中になかったのです。

それを、割礼の元来の目的を、主ご自身が呼び起こされました。それは、ユダヤ人が、ただ肉だけではなく、御霊において心の割礼、つまり新しく生まれることが、まことのユダヤ人なのだということ

なのです。「ロマ 2:28-29 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。」

御霊によって心が一新されることであれば、異邦人であっても、その関係が持てるということを、ペテロは知ったのでした。エルサレムの公会議において、ペテロは述べました。「15:8-9 そして、人の心をご存じである神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」

2A 事の次第の説明 4-17

1B 順序立てた説明 4

⁴そこで、ペテロは彼らに事の次第を順序立てて説明した。

ペテロは、ルカと同じような思いを持っていたと思います。使徒たちにも、ユダヤの兄弟たちにも、断片的な情報がただ流れるだけだったのでしょう。そこで、事の次第を順序立てて説明していく必要があります。この作業は、とても大切です。福音書の著者たちが、イエスのよみがえらえたことについて、その事の次第を順序立てて書き記しましたね。それは、イエスが三日目に、墓からよみがえられたという事実こそが、人々を救うことばになるからです。同じように、今、異邦人が異邦人のままで、救われることができるのだということは、同じように、しっかりとした事実に基づかないといけません。

2B 天からの三度の幻 5-10

1C 汚れたもの 5-8

⁵私はヤッファの町で祈っていました。すると、夢心地になり、幻を見ました。大きな敷布のような入れ物が、四隅をつり下げられ、天から降りて来て、私のところに届いたのでした。⁶ その中をよく見ると、地の四つ足の動物、獣、這うもの、空の鳥が見えました。⁷ そして、『ペテロよ、さあ、屠って食べなさい』と言う声を聞きました。⁸ しかし私は、『主よ、そんなことはできません。私は、きよくない物や汚れた物を、まだ一度も口に入れたことがありません』と言いました。

前回話しましたように、レビ記には、食べてよいもの、汚れたものが区別されて、それによって、イスラエルが聖なる民であることを示しなさいと命じられています。

2C 神のきよめたもの 9-10

⁹ すると、もう一度天から声が返って来ました。『神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。』¹⁰ このようなことが三回あって、すべての物が再び天に引き上げられました。

主は、これら汚れたものとされるものを、きよめられるのだと言われます。先ほど話しましたように、神の恵みによって、そのように汚れているとされていても、主がきよめることができになるのです。ちょうど、らい病人が、汚れているのに主がきよめてくださったように、その信仰にしたがって清め、御霊によって新たにすることができます。

そして、ここでペテロが大事にしているのは、「神からのもの」「天からのもの」ということです。まず、幻を見たことを語っています。しかも、それが確認のために三回もあったということです。ペテロが自分勝手にやったことではなく、天からの啓示であることを語っているのです。

パウロも、同じように、恵みの福音が天からの啓示であることを、ガラテヤ書 1 章で強調していますね。「1:11-12 兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。12 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」だからこそ、と言っていいでしょう、ペテロもパルロも同じことを信じられたんですね。主が与えられているので、互いに相談せずとも、交わりをして、同じ福音を信じて一致していました。

3B 神の導き 11-14

1C 御霊の語りかけ 11-12

¹¹ すると、なんとちょうどそのとき、三人の人が私たちがいた家の前に立っていたのです。カイサリアから私のところに遣わされた人たちでした。¹² そして御霊は私に、ためらわずにその人たちと一緒に行くように言われました。そこで、ここにいる六人の兄弟たちも同行して、私たちはその人の家に入りました。

ここで大事なのは、タイミングと御霊の語りかけです。天の幻があったちょうどその時に、カイサリアから遣わされてきた人が来たのです。そして、ためらわずに行けと御霊に命じられたのです。自分ではなく、神がなさっていることなのだということです。

さらに、これは大きな事件になるかもしれないと察知して、ペテロは、二人だけの証人でよいところ、その三倍の六人の証人を連れて行っています。「ここにいる六人の兄弟たち」と言っていますから、その証言できる兄弟たちが目の前にいるということです。

2C 御使いの命令 13-14

¹³ すると、その人は、御使いが自分の家の中に立っているのを見たこと、そして次のように語ったことを私たちに話してくれました。『ヤツファに人を遣わして、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。

¹⁴ その人が、あなたとあなたの家の者たち全員を救うことばを、あなたに話してくれます。』

コルネリウスも、自分で勝手にペテロが来るようにお願いしたのではありません。御使いが現れたのです。そして、10章にはありませんでしたが、コルネリウスに御使いが、「あなたとあなたの家の者たち全員を救うことばを、あなたに話してくれます。」という言葉をお話していました。

4B 聖霊のバプテスマ 15-17

そして決定的なのは、次の出来事です。

1C 神の約束 15-16

¹⁵ そこで、私が話し始めると、聖霊が初めに私たちの上を下ったのと同じように、彼らの上を下ったのです。¹⁶ 私は主が、『ヨハネは水でバプテスマを受けたが、あなたがたは聖霊によるバプテスマを受けられる』と言われたことばを思い起こしました。

コルネリウスとその一家が、まさに彼らが五旬節の時に体験したことを体験しました。聖霊に満たされて、異言や預言を語ったりしたのです。ここで大事なことは、単なる現象ではありません。ペテロが言っているように、主イエスご自身の約束です。「ヨハネは水でバプテスマを受けたが、あなたがたは聖霊によるバプテスマを受けられる」であります。使徒の働き 1 章で、主が語られたことです。また、ヨハネの福音書 14-16 章で、もうひとりの助け主として来られる約束を語っておられました。それが、自分たちユダヤ人だけでなく、異邦人にも与えられたのを目撃したのです。

初めに聖霊が弟子たちに下った時に、それは革命的なことでした。イエスを信じ、イエスの弟子となっている者たちすべてに、聖霊が降ったことです。ペテロは、それはヨエルの預言の成就だと言いました。「2:17-18 神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。」

そうなんです、すべての人に御霊が注がれます。それまでは、一部の預言者や祭司たち、王たちに御霊が注がれていたのです。さらに、ペテロは、こう言ったのです。「2:39 この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」遠くにいるすべての人とまで、言っています。そういったのは、預言だったのですが、ペテロ自身がまさか、それに異邦人に含まれるとは思っていなかったことでしょう。五旬節では、世界中からユダヤ人たちが集まってきましたから、離散のユダヤ人たちのことを想定していたのだと思います。

2C 妨げられない神の賦与 17

¹⁷ ですから、神が、私たちが主イエス・キリストを信じたときに私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが、神がなさることを妨げることができるでしょうか。」

ここがペテロの最も言いたかったことです。自分は神のなさることを妨げることはできない、ということ。神にすべての責任があり、自分が邪魔しないことが、みこころだということです。サンヘドリンでも、ガマリエルがこう言っていました。「5:38b-39 もしその計画や行動が人間から出たものなら、自滅するでしょう。39 しかし、もしそれが神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすると、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」

御霊によるリバイバルは、このようにして起こります。つまり、霊的な覚醒が起こっている時に、それは人が妨げることのできないものとして、ただ主に従うことしかできないのです。それを自分たちで起こして、運動にするというものではないのです。一方的に主が、圧倒的な力で臨まれ、それで主の前にひれ伏すだけなのです。

そこには、自分の好きではない人たちが集まるかもしれません。50年前、カルバリーチャペルという、小さい教会には、多くのヒッピーが礼拝に集ってきました。お風呂には入っていませんし、裸足ですし、またマナーがなっていません。それでも、主が呼んでくださった人たちだとして、愛をもって受け入れていきました。けれども、一部に反対する人たちもいたのです。「髪の毛を洗って、足を洗ってからここに来させるべきだ。」という意見です。主の御霊が新しいことをしておられるのに、今までのやり方が邪魔しているのです。

そして、牧者チャック・スミスは興味深いことを話していますが、そうやって反対する一部の人は、主に明け渡した生活をしているわけでは必ずしもなく、祈り会にも来ない、反対だけすると言っていました。私たちは、神の寛容さのために、祈り、へりくだる必要があります。愛する訓練です。

3A 異邦人の救いを喜ぶ教会 18

1B 悔い改める者への喜び

¹⁸ 人々はこれを聞いて沈黙した。そして「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

ついに、エルサレムにいる兄弟たちが、異邦人にも、いのちに至る悔い改めを与えられたのだとして、神をほめたたえています。彼ら自身が、罪を悔い改めて、それで聖霊を受けたのです。ペテロがこう、彼らに説いていたのです。「2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」悔い改めて罪の赦しを得ます。そして、イエスの御名によってバプテスマを受けます。そして、聖霊のバプテスマも受けることになります。

1C 失われたものを捜す者

こうやって、主イエスの心を彼らも持つことができました。冒頭でお話した、パリサイ人の態度

を改めることができました。イエス様が罪人や取税人たちと食事をしている時に、主がどのような名も思いであったのかを、三つの喩えで語られましたね。百匹の羊のうち、一匹が迷子になって、九十九匹を置いて、捜しに行き、見つけました。また、十枚の銀貨のうち一枚をなくして、くまなく捜したら、出てきました。あの喜びです。「ルカ 15:10 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」そして、あの放蕩息子の喩えを、主は語られました。

2C 終わりの日の諸国民への預言

そして、エルサレムの使徒たち、ユダヤの兄弟たちは、異邦人にも御霊が注がれたのを見て、終わりのしるしだと思ったに違いありません。預言者たちが、数多く、諸国民に対しても神が救いを及ぼすことを預言していました。しかしそれは、彼らによって遠い将来でした。例えば、ゼパニヤはこう預言しています。「3:9 そのとき、わたしは諸国の民の唇を変えて清くする。彼らはみな【主】の御名を呼び求め、一つになって主に仕える。」ゼカリヤは、御霊がエルサレムの住民に注がれることを預言し、そして主が来られて、「14:16 毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る」とあり、終わりの日に諸国の民も主に立ち返ると信じていたのです。それが、今、起こっているとみなしました。そして、それは正しいです。その時から終わりの日が始まりました。

2B 古い考えに縛られた人々

けれども、使徒の働き 15 章に、割礼派の人たちがアンティオキアの教会に来て、異邦人の信者に対して、割礼を受けて、律法を守ることで、救われると教えたのです。古いものが残っていると、新しい御霊を受け取ることができません。イエス様は、新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れないといけないと教えられました。私たちがいつも、神の恵みによって、神の寛容を身に着け、心の壁を崩していただき、届くべき人に届くことができますように。